

週報

こひつじ

第39巻 39号
 大津キリスト教会
 菊池郡大津町室 119
 TEL 096-293-4470
 FAX 096-293-4961
 牧師 米村 英二

死ねば、豊かな実を結ぶ

その三 困難な土壤に蒔かれる

どちらかという私一人での生活を与えてはくださらなかった。そんな私を神はかまわず複雑な環境に投げ込まれた。

第一に、思っていたより早く結婚した。一人だった生活が二人になり、子どもが生まれると三人、やがて四人になる。

「ご存じのように結婚生活は単純ではない。それぞれ違った意志を持つ者が一緒に暮らすのだ。衝突はある。生まれたばかりの子でさえおとなしくはしてくれない。ときには夜泣きで自分の意志を通すのである。それにはずいぶん苦労した。」

「つまり神は、私に静かなひとり」

「小さな群れとは言え、その責任を負うことは私のもつとも苦手とすることだった。しかし神は、有無を言わず、そこに私を投げ込まれたのである。」

「それは何のためか。そこで私が砕かれるためだった。」

神は、このようにわれわれを地中に蒔かれる。その地中は時にはつらく感じられることもあるだろう。けれど、やがて私たちはそこで芽を出し、実を实らせてゆくのである。」

「四〇年以上も前のことだが、名古屋の修養会に講師として招かれたことがある。大阪のG牧師と一緒に、G牧師が三回話すことになった。私の話がすむと、

「いいねえ、君は。もう終わったね。ぼくはまだあと二回ある。それなのに一回分の説教しかぼくには準備がない。だから、これをどうやって二回に引き延ばせるかと、いま思案しているところなんだよ。」

「大教会の牧師なのに、なんと正直な方だろうと思ったものだ。」

「のちにその教会に通っていた人から聞いた話だが、日曜日の朝、

「G牧師の最初のお子さんは、重症の障害児だった。話すこともで

「G牧師は言われる。すると牧師夫人が代わって説教されるそう

「それを聞いて私は驚いたが、それにもかかわらずその教会は成長し続ける。」

「なぜなのか。同じ教団の友人の牧師に聞いたら、思わぬ答えが返ってきた。」

「G牧師は天才的宗教家なんだよ」「それはどういう意味ですか」「G牧師は自分に死んだ人なんだ。自分がないんだよ。正直で、聖霊に導かれるままなんだ。だから強

きず、ずっと寝たきりだった。Gから明日にかけてユースキャンプを
牧師の人生に与えられた負担は大行ないます。

きかった。G牧師は、何度も神に
こう訴えたことがあったようだ。

「ああ、この子がいなければ、も
っと伝道にも訪問にも励むことが
できたのに」

G牧師はそのお子さんのために
縛られた人生を送っておられたの
である。神は確かにG牧師を特殊
な環境に蒔き、そこで彼を教え、
砕き、慰めておられた。

そのことは私に教えてくれた。
G牧師の弱さにこそ、神の豊か
な実りの源泉があったのではない
かと。

今日の礼拝

○第一礼拝は午前10時から、
第二礼拝は午前11時から。

○教会学校は午前10時から。
○説教は、日野キリスト教会(東
京)の岩崎義幸牧師。

ユースキャンプ

○今日(二〇月八日)の午後か

ら明日にかけてユースキャンプを
行ないます。

○どなたも自由に参加できます。
○費用は自由献金によります。

先週の出席

第一礼拝が五五名、第二が三一
名、合計八六名(男二八、女五八)

子ども一名。合わせて九七名。

大阪・東京の旅

ぼくたちは九月二二日(金)の
午後六時に大阪に到着。翌三日午前
一〇時には、大阪と彦根の教会の
若い説教者たち六人が、ニューラ
イフ教会に集まってきましたので、
午後三時まで勉強会でした。ぼく
に求められたテーマは「説教とそ
の準備」について。
ニューライフ教会の豊田さんは、
その日の感想を次のように書いて
くれました。

にお招きした。牧師になってから、
幾度となくご自宅に泊めていただ
き、薫陶を受けてきた。「シン・聖
書塾」はニューライフ(大阪教会)
とニューホープ(彦根教会)の説
教者が研鑽を積む毎月の学び会で
ある。

米村さんの講義を通して、説教
とは「変革の力」であるとの前提
から、いかに御言葉が説教者自身
を変革したのか、その有様を示す
ことの大切さを教えられた。説教
準備についても示唆に富む言葉に
圧倒される。若い牧会者には、そ
の教えにふれて欲しい。(豊田)

翌日は、ニューライフ教会で礼
拝の説教をして、午後には、東京
へ新幹線で向かいました。
それまではよかったのですが、
東京のホテルに着いて、妻が、体
調をくずしました。熱が三七度あ
ります。すぐに長男の耕一に電話
し、コロナの検査キットを持って
きてもらいました。やはり陽性で
す。

東京での予定をキャンセルし、
熊本に帰ろうと思いましたが、治
療を受けないまま長時間の旅では
彼女の容態がどうなるか心配でし
た。結局、耕一宅の一室に隔離し
てもらうことになりました。すぐ
に医師と連絡をとってくれ、薬を
飲んだのが功を奏したのか、妻の
熱は翌日には下がり、二九日(金)
にはぶじ帰ってこられました。

問題はぼくです。二五日(月)
妻を耕一宅に送ると、その足で羽
田に向かい、熊本に帰ってきたの
ですが、二七日(水)に、結局ぼ
くも発熱しました。コロナです。
多くの場合、熱が三九度を超え、
ややつらい日々でしたが、病院か
らもらった薬で一〇月一日(日)
には平熱に戻りました。

妻は東京におり、ぼくが一人だ
ったことから、多くの方に心配
をいただき、届けられた食料など
には助けられました。感謝です。
今はまだ咳が出たりして、すつか
りとは言えませんが、元気です。
耕一からも電話がありました。

コロナに感染した妻を五日間もあ
ずかってくれたのですから、心配
でしたが、家族への感染はなかつ
たようで安心しました。

九月二三日(土)私のメンター
のひとり、米村英二さん(大津キ
リスト教会)を「シン・聖書塾」
